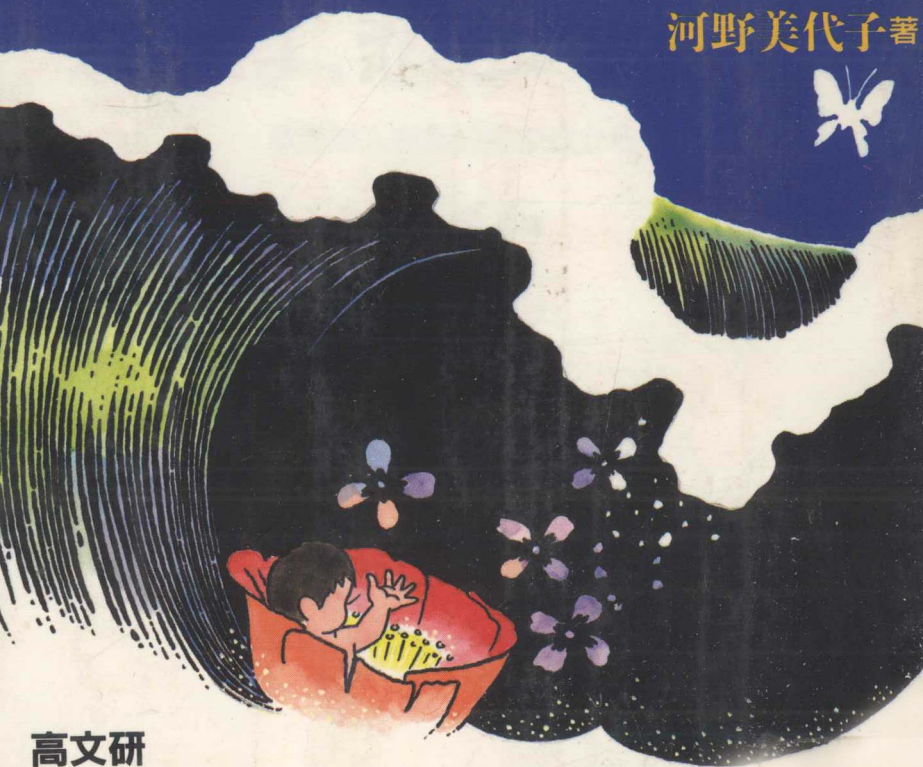


考える高校生の本 20

# さらば、悲しみの性

●産婦人科医の診察室から

河野美代子 著



高文研

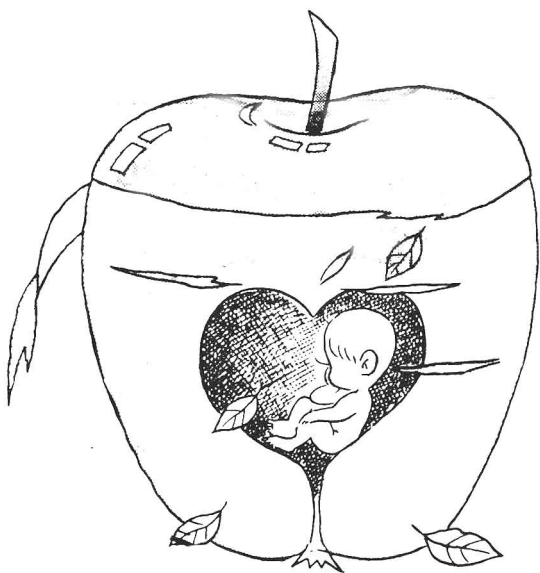


考える高校生の本 20

# さらば、悲しみの性

●産婦人科医の診察室から

河野美代子著



• 高文研

河野美代子 (こうの・みよこ)

1947年、広島に生まれる。1972年、  
広島大学医学部卒業。広島大学医学  
部産科婦人科学教室入局。1981年秋  
より、特定医療法人・あかね会土谷  
病院（広島市中区中島町）に勤務。



さらば、悲しみの性

一九八五年 四月二〇日 第一刷発行  
一九八六年 四月一〇日 第二刷発行

★定価 一、一〇〇円

著者／河野美代子

発行所／高文研

東京都千代田区猿樂町二一一八

三恵ビル内（〒1101）

TEL 03 2295 3415

振替口座番号 東京6 118956

印刷・製本／凸版印刷株式会社

★乱丁・落丁本については、送料当方負担でお  
取りかえいたします。

0037-10020-2471

この本を読んだ人の中には、こんな疑問をもたれるかたがあるにちがいありません。

「高校生に向かって、ここまで語る必要があるのか——？」

そうだ、と私たちは考えます。

いま必要なことは、現実をおおいかくすことではありません。薄笑いでお茶をにごすことではありません。まして、強権をもってタブーを強化することではありません。

いま必要なのは、真実を正面から語ることです。性について、あいまいな言葉でなく、たしかな言葉で、その真実を語り、また、性を通して「人間」を語ることです。

偏見はつねに、無知のきょうだいです。若い人たちが、自分のなかに豊かな人間観をつくりあげていくには、性についてのたしかな認識がどうしても欠かせないと考え、私たちはこの本をつくったのです。

# I 傷ついた性の光景

7

なぜ産婦人科の医師になったか

多すぎる若い女性の人工中絶

涙なしに中絶する人はいない

一年半で六回も中絶した女性

人工中絶に安易な男性

赤ちゃんのいのちよりクルマがだいじなのか

手術を受けるのは男性ではない

卵管が破裂した女子高生

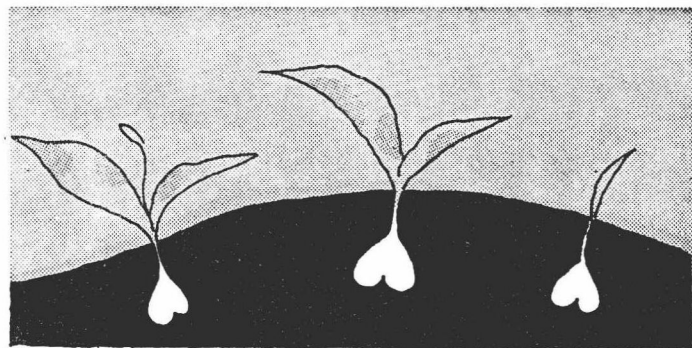
「妊娠はお互いの責任」という大学生

ある情けない男性の話

男がダメなら、女もダメだった

「尽くす女」の悲劇

抜け落ちてゐる性の大原則



真夜中にはこび込まれた少女  
“從順”が生んだ結末

## Ⅱ 性にとりまとう病氣

産婦人科を訪れる人たち

トリコモナス膣炎とカンジダ膣炎

尖圭コンジローマ

お金を媒介にした性

淋病とその感染源

梅毒にかかったある女性の場合

思春期痩せ症と無月経

61

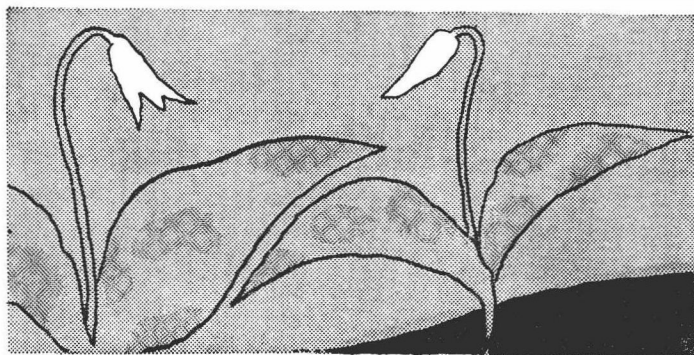
## Ⅲ 人工中絶とはなにか

人工中絶は一晚入院が原則

安易な中絶が安易な妊娠を生む

発達の途中でピルは使えない

89



妊娠初期の人工中絶

よくまちがわれる妊娠月の数え方

妊娠中期の人工中絶

断たれる赤ちゃんのいのち

人工中絶が残す心の傷あと

#### IV 避妊のむずかしさ

自然の法則に逆らう避妊

知らないのに知ってると思っている錯覚

中途半端な避妊の知識は恐ろしい

おとなたちの失敗例

若い人たちの失敗例

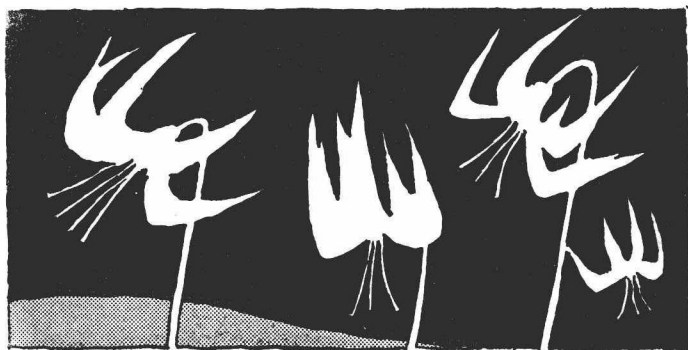
一〇〇%安全な避妊法はない

#### V 十六歳の母たち

ある十六歳の母の話

135

119



親に救われた十六歳

苦しみぬいて変わっていった親たち

ついに許せなかった親

親の説得に負けた女の子

十代で子どもを産むときの三原則

## VI

### 喜びの性を求めて……

いやなことは「いや」といえる女性に

ある十七歳の少女の場合

女性の性と男性の性のちがい

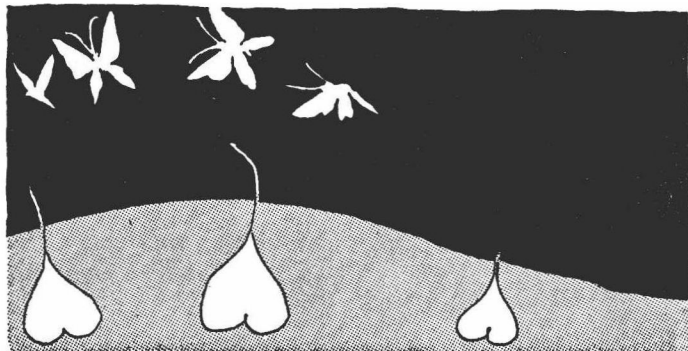
豊かな性を実らせる条件

男性も家庭づくりに参加して

分娩室で見る歓喜と悲哀

最後にいっておきたいこと

あとがき……





写真・英 伸 三

イラスト・勝 又 進

装丁・平 田 嘉 男

I  
傷ついた性の光景





◎——なぜ産婦人科の医師になったか

私は産婦人科の医師です。広島市内の病院で働いています。一九四七年（昭和二年）の生まれで、家庭には夫と子ども二人、小学生の男の子と女の子がいます。

広島大学の医学部に入学したときからずっと、私は小児科の医師になりたいと思っていました。特別な理由はなく、ただ子どもが好きだから小児科へ、と単純に考えていたのです。しかし、卒業まぎわに、私は、小児科でなく産婦人科へすすみたいと考えるようになりました。

医学部の場合は、一般の学部よりも修業年限が二年ほど多く、六年かかって勉強します。だから、卒業するときはストレートでいっても二四歳になりますし、その間にはいろんなことが起こってきます。恋愛も経験すれば、結婚の問題に直面したりもします。私は医学生だということで、友人たちからいろんな相談を受けました。人工中絶のこととか、また性にともなう病気のこととか。

それでわかったのは、当時、広島市内には女性の産婦人科医がほんの少ししかいらっし

やらないということでした。

もちろん、産婦人科医が女性でなくてはならないということはありません。男でも女でもいい、ただもう少し話のしやすい産婦人科医がおられないかと捜し求めるうちに、女性としてはやはり同じ女性の産婦人科医がもっとたくさんいていいんじゃないか、と考えるようになったのです。「自分もやってみようか」そう思いました。

こうして、私は、卒業まぎわに小児科から産婦人科へと志望を切りかえました。そして、とくに性教育について勉強したいと考えたのです。

ところが、性教育というのは、科学の分野としてはまだ歴史も浅く、研究の体系も方法もまだ確立してはいませんでした。つまり、細胞を顕微鏡でのぞいたり、血液を採取してその中の酵素こうそをはかったりという、いわゆる医学の研究からはハミ出してしまうのです。性教育の研究というのは、医学の研究分野としては存在していませんでした。

そこで、とにかく産婦人科医としての技術と知識を身につけたいと考えて、卒業後、大学病院の産科婦人科学教室に入局して、学ばせてもらいました。途中、二度の出産や育児等で、ずいぶん他の方たちに迷惑をかけたり、足ぶみをしたりしましたが、何とか仕事をつづけてきました。そして一九八一年（昭和五六年）の秋、現在勤務している病院に産婦

人科が新設されるのと同時に、移ってきました。以来、今日まで三年半がたちます。

はじめは、産婦人科医は私一人でしたが、そのうちだんだん忙しくなり、一九八三年の秋から、私の後輩でやはり女性の寺本先生が赴任し、現在は二人で診療をしています。

ところで、大学病院へ来る患者さんというのは、おもに町の医院、病院から紹介されて来る方たちがほとんどです。したがって、重病の患者さんたちが多い。婦人科でいえば、子宮ガンとか卵巣ガン等。だから大学病院の婦人科病棟というのは、いわばガン病棟みたいなものでした。その婦人科病棟で十年間、私は女性が性器の病気になるといことはどんなに悲惨なことかということを、胸の奥にしっかりとたたみこんできたつもりです。

ところが、さて、新しく町の一病院に移ってきてみて、そこで私は、予想もしていなかったことに出会い、びっくりしてしまいました。まるで考えもしなかった毎日が、私を待っていたのです。

◎——多すぎる若い女性の人工中絶

若い人がたくさんくるのです。とってもたくさん、やってくるのです。はじめは新設の

産婦人科で、いわばゼロからの出発でしたから、当然患者さんは少なかったのですが、そのうちに患者さんの数はだんだんふえてきました。その中でもとくに、十代の患者さんがものすごくふえてきました。

その中心は高校生です。高校生を中心とする十代の若い患者さんが、とても多くやってくる。いまの病院で診療をはじめから三年間で、私は十代の患者さん四百人以上に接してきました。

その彼女たちは、例外なく、傷ついています。心身ともに、ボロボロに傷ついています。私にとっては、試行錯誤の連続でした。くる日もくる日も、傷ついた若い人たちに接しているうちに、何ともいいようのない思いが、私の胸の底にたまってきました。これではだめだ、これではいけない、と歯ぎしりするような思いなのです。

傷ついている子は、一日も早く傷を癒<sup>い</sup>してあげたい。身体的にも、精神的にも、一日も早く傷を治して、立ち直ってほしい。そうして、もう一度、明るく生きていつてほしい。そう思って、ケア（治療）をしているつもりだけれど、でもやっぱり傷ついてからでは遅すぎると思っています。傷つかないで、明るく生きていった方がいい。どんなにくやんでも、取り返しのつかないことだってあるのです。そうならないために、若い人たちはもっ

とかしこくなつてほしいのです。傷つく前に知ってほしい、これだけは知ってほしいと思うことが、胸いっぱいたまってきました。

ところが、こういうと、高校生の中には何か興きようざめたような顔をする人がいます。露骨にいやな顔をする人もいます。「性のことなんか、もうみんな知ってるよ」というわけです。

しかし、ほんとに知っているのでしょうか。冗談ではない。私は産婦人科医で、また結婚して十一年になりますが、性についてはまだわからないことだらけです。高校生の身で、性についてみんな知っているなどと思ひあがらないでほしい。甘く考えてほしくない、そう思うのです。

一方、性の問題は、これから長い人生を生きていく上で、絶対に避けては通れない問題です。はじめから悲惨な人生を望んでいる人は、どこにもいないでしょう。かけがえのない人生を、豊かに生きぬいていくためには、性について、正しい知識をもち、その本質を正しく認識することが、どうしても必要なことだと思います。

そういう思いから、最近、私は広島県内の高校生たちに話をしてまわるようになりました。私の話を聞いた多くの高校生たちが、「今まで本当に自分が無知であったことがわか



った」とか、「後輩にも話してやってほしい」とか、書き送ってくれました。

でも私は、病院に勤務する医師です。毎日の仕事があります。患者さんには絶対、責任をもたなければなりません。病院での外来診療と、毎日のようにある出産、子宮筋腫や卵巣腫瘍等の手術、また救急患者さんの緊急手術等、二四時間、目のまわるような忙しさです。その合い間を縫うようにして学校を訪れ、話をすることは、本当に困難になってきました。

でも、もっともっと多くの人たちに、真実のことを知ってほしい。そう思って、私は、この本を書くことにしたのです。

◎——涙なしに中絶する人はいない

大学病院時代から数えてもう十三年、いまも一カ月に平均二十人から三十人の赤ちゃんの誕生に、私は医師として立ち会っています。でも出産には、いつまでも慣れる、ということはありません。赤ちゃんがはじめてそのからだを空気にさらして、「オギャアッ」と泣く瞬間、胸にこみあげてくるような感動を覚えます。そして、ほんとうに心から「おめで